

悔しさをバネに(本校50周年記念誌より)

本校元教諭 白附 勝彦

昭和33年7月、吹田高校定時制の最初の専任体育教師として赴任。4ヶ月が過ぎた頃である。全日制の体育主任から話があった。「今迄全定一緒に体育祭をしていたが、定時制の生徒は本当に邪魔なんや、青い顔していつもピリを走っているのは定時制なんやから…。今年から君とこだけでやったら…。私は「ご迷惑でしょうが、今年だけ一緒にさせて下さい。次回からは定時制単独でやります。しかし悔しかった。昼間の疲れに鞭打って通学している生徒を何と思っているのか、太陽に当たっていないのだから青い顔はあたりまえやろ！」

「よーし、全日制の生徒に一泡吹かせてやろう」。当時定時制には名前だけの陸上競技部はあったが、そこに授業で足の速い男女を勧誘して強化し、毎日放課後校舎の明かりだけで、ほとんど真っ暗に近いグラウンドで練習した。勿論生徒にはその趣旨を伝えてあったが、本当によく付いて来てくれた。

みるみる強くなった。10月の体育祭が近づいた。定時制からは全ての競技種目に男女それぞれ1名又は1チームしか出場できない。それも幸いした。競技種目に出場しているのは全て陸上競技部員である。結果は明らかである。青い顔をしてトップを走っているのは、ほとんどが定時制生徒だった。胸のつかえが一気におりたようで、深い満足感を味わった。若かったのだと思う。

その後、練習を続けた陸上競技部は、翌年の府下定時制陸上競技大会で、女子総合優勝を勝ち取ったのである。悔しさをバネに生徒と一緒に一生懸命頑張った私の教師としての青春時代、22歳のスタートだった。

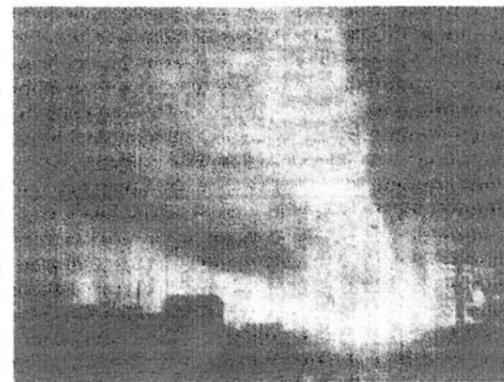
平成8年、定年退職するまでの38年間、悔いのない教師生活を送れたのも、生徒と共に頑張り燃えた吹田高校定時制のすばらしいスタートがあったからだをつくづく思う。



本館より火災(昭和32年)



焼け落ちた校舎



夜をこがして炎上する津島地区日蓮の火葬



母校の火災に難火を背して書類持ち出しに大膽の吹田高校生

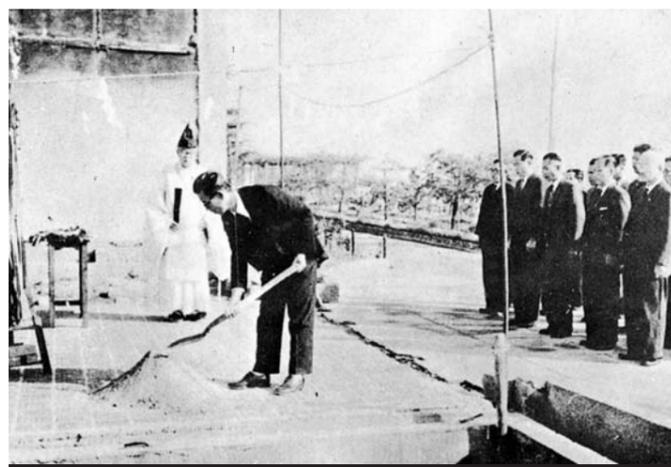
吹田高校焼く

漏電? 生徒が書類持ち出す

二十三日午後三時五十分、大阪吹田市野三三、大阪府立吹田高校(吹田市長)の本館、講義室、図書室、放送室、計十室、小使付等から出火。吹田市消防署から十三台のポンプ車が出動。消火に当たったが、煙は水利の炬燵の隅に、空気が滞留していたため火の回りが速く、本館を丸ごと焼く。生徒は書類を、本館を丸ごと焼く。生徒は書類を、本館を丸ごと焼く。生徒は書類を、本館を丸ごと焼く。

二日、本館は約五百三十坪の小使付、講義室、図書室、放送室、計十室、小使付等から出火。吹田市消防署から十三台のポンプ車が出動。消火に当たったが、煙は水利の炬燵の隅に、空気が滞留していたため火の回りが速く、本館を丸ごと焼く。生徒は書類を、本館を丸ごと焼く。生徒は書類を、本館を丸ごと焼く。生徒は書類を、本館を丸ごと焼く。

産経新聞(昭和32年3月24日朝刊)の記事
原因は漏電とみられている。この年は全国的に異常乾燥がみられた。そのため火の回りが速く、被害は11室にも及んだ。



本館再建のための地鎮祭(昭和32年)



正門両側のウバメガシの向こうに再建された鉄筋校舎が見える